

## 『東北の中世史5 東北近世の胎動』

滝尻 侑貴

樋口氏によって新たに開拓された『話記』研究のコースは、徹底した史料批判に基づく、もつともオーソドックスな方法でありながら、新しい画期的な成果を生んでいると評価できる。また、編者の人選も妥当で、大家から中堅・新人という登用で、執筆者たちの持ち味を心憎く生かした、これからの研究をさらに深化させるにたる斬新な知見に満ちたものとなっている。

コラムもコクのある内容である。古くからの問題でありながら、新鮮な問題を兼ね備えた内容であり、一番根本の問題を扱う編者の面目がよくでている。

一〇〜一二世紀初頭の北奥羽の歴史を知るには必読の基本文献で、前九年・後三年合戦の時代史をこれほど深く掘り下げた研究は他に類例を求めたいのではないか。まさに当該期の研究は、画期的な新段階を迎えようとしているといえよう。

(二〇一六年四月刊、四六判、二七八頁、カラー口絵四頁、

定価二四〇〇円＋税、吉川弘文館)

(いとう・ひろゆき 岩手大学平泉文化研究センター客員教授)

【追記】本書の執筆陣の一人、窪田大介さんが十一月七日夜、突如死去されました。生前のご厚誼に感謝し、謹んで哀悼の意を表します。合掌。

本書は「東北の中世史」シリーズの五冊目であり、シリーズ最後の巻となる。本書が扱う年代は、天正一八年（一五九〇）から寛永末年までの、約五〇年間というシリーズで最短の期間となっている。この期間は、いわゆる中近世移行期で、自治体史などでは本の構成上、分断されて記述されることが多い期間である。しかし、近年の中近世史の研究に則り、この移行期の変化を一挙に捉えられることを念頭に、執筆されているのが本書となっている。

本書の構成と執筆担当は次の通りである。

序 転換する東北：高橋 充

一、奥羽仕置：高橋 充

① 秀吉の遠征と仕置軍

② 検地・刀狩・城破―仕置の内容―

③ 終わらない仕置―一揆と鎮圧―

④ 奥羽仕置の光と影―文祿・慶長初年の動向―

二、朝鮮出兵と奥羽の城郭：太田 秀春

① 織豊系城郭の登場と朝鮮出兵

② 奥羽における近世城郭の誕生

- ③ 伊達氏の城郭―仙台城・支城・懸造―
  - ④ 伊達氏領内の城郭にみる中世から近世への移行
- コラム 石垣・礎石・瓦葺：垣内 和孝
- 三、関ヶ原合戦と奥羽の諸大名：阿部 哲人
  - ① 豊臣政権の政治抗争と奥羽大名
  - ② 家康の会津出兵と奥羽諸将
  - ③ 奥羽大名の戦い
  - ④ 戦後処理
- コラム 桃山茶陶と大名窯：飯村 均
- 四、街道・町と商人：阿部 浩一
  - ① 戦国時代の南奥羽の街道
  - ② 戦国時代の南奥羽の町場
  - ③ 街道を行き交う物資・情報と商人
  - ④ 南奥羽の近世化と街道・町・商人
- 五、大名と村・百姓：籠橋 俊光
  - ① 伊達氏の対百姓政策
  - ② 領内支配機構の整備
  - ③ 村役人機構の変遷
- コラム 奥羽を襲った慶長地震：高橋 充
- 六、宗教と信仰：曾根原 理
  - ① 仏教教団の動向
  - ② 基層宗教との習合
  - ③ キリスト教への対応

- ④ 東照宮と在地の宗教
- コラム 慶長遣欧使節：佐々木 徹
- 七、奥羽の富のゆくえと人びとの移り変わり：兼平 賢治
  - ① 奥羽の山海の富と人びと
  - ② 奥羽の鷹と馬をめぐる
  - ③ 奥羽の大名たちの試練

一章では、奥羽仕置と再仕置をテーマとし、天正一八年（一五九〇）の小田原攻めからの豊臣政権の奥羽諸氏に対する政策までを年代ごとに記している。その中で、仕置の具体的な内容である検地や刀狩、城破についても触れている。そして、豊臣政権としては想定していなかった、政策に対して発生した各地の一揆を地域ごとに記し、これに対する奥州奥郡仕置軍の対応、さらにその後の再仕置について詳しく紹介している。その上で、奥羽仕置の評価について、平和的性格や、征伐を欠く仕置きであることが強調されがちであるが、最終的には、服属しないものを滅ぼす戦争であったと結ぶ。最後に仕置以降の動向について、国替えや検地を論じ、蒲生氏郷の死の影響を論じて、三章につなげている。

二章では、奥羽の築城技術の変遷と築城意義の変容をテーマとしている。従来「土造りの城」であった奥羽諸氏が、豊臣政権と繋がりを持つことで、「石造りの城」の技術を吸収していった過程を論じている。朝鮮出兵で肥前名護屋城に集められた奥羽諸大名は、ここで豊臣政権が所有する石造りの築城技術と触れ合うことになる。さらに、倭城築城のため渡海した伊達政宗と上杉景勝は、最新の織豊系築城技術を学ぶ。特に

伊達氏について言及しており、石垣の普請に自ら参加し、技術を吸収して帰国後、領内の城郭に還元していく過程を論じている。こうして築城技術を高めていったが、時代の移り変わりとともに城は軍事施設から権威演出の施設へと変遷していく。そのステータスシンボルとして虎口の変化に着目し、藩政期には藩主権力の象徴として虎口の一種である「馬出」を用いたことを論述している。

三章では、豊臣政権内で権力闘争と奥羽諸氏の動向をテーマとしている。豊臣秀吉の死後、豊臣政権内における徳川家康派と石田三成派の政治抗争が頻発するなか、奥羽諸領主の派閥について触れている。従来、諸領主はいずれかの派閥に属していたと考えられてきたが、中央の政局により進退が変化する状況で、諸領主も各派へ合従連衡を繰り返していたとする。そのような状況で起こった関ヶ原合戦と奥羽抗争の発端となる、会津出兵における奥羽諸領主の動向をまとめている。上杉・伊達・最上・小野寺・南部・津軽などの動向を論じ、最後に戦後処理についてまとめ、これらの抗争が、一見戦国的・中世的価値観を表しているようにみえるが、実は近世的権力の統制のもとに展開していたと結論付けている。

四章では、伊達氏の支配した南奥羽を事例として、街道とそれに付随する町場、通る物と人について変遷を追っている。街道では領内の道と、領外へと到る道を考察している。町場については、伊達植宗から順に時代を追って本拠地付近の町場について、さらに蘆名氏の領地の町場を論じ、実像に迫る。街道を通る物と商人については、伊達領内の商人と他国の商人それぞれに触れるとともに、商人が運ぶ物資や情報についても

論じている。また商人社会について、商人の法「商人さばき」などから有力商人のネットワークについても論じている。最後に街道・町場・商人の近世化について、築田氏の事例から中世以来の有力商人は近世においても指導者の地位を保持していたと結論付けている。

五章では、戦国から近世へと移り変わる中での領国・百姓政策を伊達政宗の支配を事例としてみている。百姓への政策では、目安や憐愍（れんみん）を採り上げ、戦時から平和へと移り変わる上で、領民の取り込みから、管理へと意義が変容していったことを論じている。領内の支配体制を代官と村役人を事例に、中世代官から近世代官への変化、肝入・大肝入の成立と役割などを考察し、最後に政宗の百姓宛に発給された黒印状に触れている。この百姓政策の成立期に見える黒印状は藩の政策判断を表わし、以降百姓宛の黒印状が見えなくなることから、政宗が百姓から見える位置にあり、政宗もまた百姓を近く感じていた藩主だったと結論付けている。

六章では、奥羽における宗教勢力の展開と、各地での宗教対策について論じている。禅宗系では古く奥羽に根付いていたのは天台宗であったが、時代の流れとともに臨済宗を経て曹洞宗へ、念仏系では時宗から本願寺系真宗、浄土宗へ変わっていく過程について考察し、その理由を述べている。また、東北における宗教の地域性として、一組織が一派に統一されない緩やかな結合状態であったと指摘する。事例として、出羽三山の羽黒修験、阿弥陀信仰と聖徳太子信仰の「まいるのほとけ」、善光寺信仰などをあげ、「基層信仰」の観念が根付いていたと考察する。その他、キリスト教についても触れ、東北地方への流入から、布教、排

斥まで各地の状況を踏まえている。最後に東照宮に触れている。東照宮は徳川家康を神とする幕府の宗教装置であるが、東北では早くから勧請した弘前や会津がある一方、米沢や盛岡には奉った痕跡が見られず、対応は領主や地域によって異なっていたとする。東照宮を頂点として緩やかに存在していた近世の宗教秩序の中において、東北地方は多様性を保持していたと結んでいる。

七章では、奥羽の近世への移り変わりを物と人の動きから論じている。まず、金銀銅の鉱山と採掘に流入するキリシタンの動き。廻船商人については中世の日本海海運と、近世の太平洋海運における商人との繋がりが次に、権威誇示に利用された馬と鷹についての興隆について触れている。幕府から公儀御鷹衆や公儀御馬買衆が派遣され、諸藩からも買求めに人が来ていた奥羽であったが、泰平の世となると買い手が少なくなっていくことから時代の変遷を述べている。最後に、大名の家と人についての考察。大名の領地支配や家臣統制を、佐竹氏や南部氏、蒲生氏、最上氏などを事例として取り上げている。それまでは器量が求められる時代で、主従関係も個人間で結ばれていた。そのため器量次第では主従関係に変化が起こり得たが、時代の変遷に伴い器量は求められなくなり、身分は固定され主従共に家の存続に力を尽くしていくようになる」と論じ、事例として八戸南部氏を挙げて結びとしている。

以上、七章で構成されているが、この他にコラムが随所に挟まれており、本章の論述を補足している。また、全章を通して、写真・図・表が適所に盛り込まれ、巻末には、略年表が付されている。年表では東北の出来事だけでなく、全国的な出来事を太字で分けて標記し、時代背景の

理解の手助けとなっている。

全体を通してみると、一・三・七章では中央の動静と、奥羽諸氏の動きを政治史の観点から、二章は城郭史の観点から、四章は流通史の観点から、五章は農村史の観点から、六章は宗教史の観点から、さらにコラムで考古学の観点からと、多角的な観点から東北の中近世移行期が描かれている。中世史を研究するものにとっても、近世史を研究するものにとっても教科書的な一冊となっていることは間違いない。

さて、本書を教科書とした場合、今後の課題となってくるのは、北・中奥羽の研究である。本書では、前述のとおり、事例として南奥羽や伊達氏関係が多く取り上げられている。奥羽においては比較的資料が多く、支配体制が見える伊達氏が軸となるのは当然のことである。この軸を元に他地域においても比較検討を試みていく必要があるだろう。無論、比較する資料自体が乏しい現状であるが、少しずつでも歩みを進めていくことが重要である。

最後に重ねて述べるが、本書は中近世移行期を通覧できる、教科書的一冊としてお勧めするものである。本書をもって、奥羽の中近世に関心を寄せる人々が増えることを切に祈念している。

(四六判、二六四頁、平成二八年三月、吉川弘文館、

定価二四〇〇円十税)

(たきじり・ゆうき 八戸市博物館学芸員)